修了生による教育評価報告書

平成 24 年 12 月

香川大学大学院地域マネジメント研究科

目次

総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第１章　修了生による大学院教育評価アンケート調査の概要
１．調査の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
２．調査実施期間 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
３．調査対象 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
４．調査の内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
５．集計方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第２章　調査結果について
１．回答者の属性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
２．分析
１．在学当時の状況について
（１）在学中の出席状況について（問 1） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０
（２）在学中勉強時間（問 2） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １０
（３）仕事で役立ったと思う科目（問 3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １１
（４）仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目（問 4） ・・・・・・・・・・・ １２
（５）土曜日の開講について（問 5） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １３
（６）プロジェクト研究について（問 6） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １３
（７）社会人組織、社会人組織以外からの支援について（問 7､8）・・・・・ １４
（８）学部学生の就職について（問 9） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １４
（９）自習室、教室の環境について（問 10､11） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １５
２．修了後の効果について
（１）ＭＢＡ取得後の評価について（問 12） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６
（２）転職、起業意図について（問 13､14､15） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６
（３）在学時の同級生との交流について（問 16､17､18）・・・・・・・・・・・・・・ １７
（４）大学院教育で身についた能力と現在の仕事で必要な能力（問 19） １８
（５）学んだことに満足しているかについて（問 20） ・・・・・・・・・・・・・・ ２０
（６）愛着について（問 21） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２１
３．現在の状況について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２１
（１）自己研修について（問 23） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２１
（２）地域活動について（問 24） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２１
（３）研究科開催の講演会・シンポジウムなどについて（問 25､26､27） ２２
（４）後期（10 月）入学の必要性について（問 28） ・・・・・・・・・・・・・・・・ ２３

３．自由記述のデータ
プロジェクト研究について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２４
カリキュラム等について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２６
改善点、要望など　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２８

資料　　アンケート集

総　括

- 170 人中 63 人（37.1%）から回答があった。

- 在学中の出席状況は、すべての授業に出席した場合を 100%として平均 86.55%であった。
  前回アンケート調査では、84%であり、若干増加している。

- 週当たりの勉強時間は、13.30 時間であった。
  前回アンケート調査では、14.3 時間であり、１時間ほど減少している。

- 土曜の開講は、必要（71.7%）、ある程度必要（23.3%）で合計 95.0%となり、必要という回答が多い。
  前回アンケート調査では、必要（68%）、ある程度必要（16%）合計 84%であり、土曜日開講の必要性が高まっている。

- プロジェクト研究については、「満足している」（40.0%）、「ある程度満足している」（46.7%）で合計が 86.7%となり、ある程度の満足度を得ている。
  前回アンケート調査では、「満足している」（26%）、「ある程度満足している」（28%）で合計が 54%であったので、満足度が大きく向上している。

- 環境（自習室、教室）については、教室は「満足している」（34.5%）、「ある程度満足している」（56.9%）で合計が 91.4%となり、9 割以上が満足と回答している。
  自習室は「満足している」（22.4%）、「ある程度満足している」（46.6%）で合計が 69.0%となり、ある程度の満足度を得ている。
  前回アンケート調査では、教室は「満足している」（9.7%）、「ある程度満足している」（61.3%）で合計が 71.0%、自習室は「満足している」（9.7%）、「ある程度満足している」（51.6%）で合計が 61.3%であったので、どちらも満足度が向上している。

- ＭＢＡ取得後の組織の評価は、意見が分かれている。

- 修了後も、71.6%が同級生と交流を持っている。
  先輩、後輩との交流も合計 28.3%で、前回の合計 16.1%から増加しており、縦のネットワークの構築が伺える。

- 研究科で学んだことについての満足度は高く、「満足している」（58.3%）、「ある程度満足している」（35.0%）と、合計 93.3%が満足と回答している。
  前回は、「満足している」（39%）、「ある程度満足している」（48%）の合計が 87%であり、満足度が向上していることが分かる。

- 研究科に愛着があるかどうかは、「非常にある」（45.9%）、「ある程度ある」（49.2%）で「愛着がある」という回答が 95.1%となっており、前回の 97%とほとんど変わっていない。

- 講演会、シンポジウムに参加希望が多い。

- 前回と同様、後期入学が必要という回答は少ない。

第１章　修了生による大学院教育評価アンケート調査の概要

１．調査の目的

この度、本研究科の修了生を対象に大学教育評価に関するアンケート調査を実施し、その調査結果を「修了生による大学院教育評価報告書」に取りまとめた。

この調査の目的は、本研究科の提供する専門職大学院教育の成果・効果を明らかにするとともに、本研究科に対する要望等を把握することを目的として実施することである。

２．調査実施期間

平成 24 年 10 月 1 日（月）～10 月 15 日（月）

３．調査対象

（１）調査対象と調査方法

調査対象は、地域マネジメント研究科の修了生全員である。入学時における帰省先の住所に調査用紙を郵送、およびメールで依頼、その他、平成 24 年 5 月 19 日のリカレントプログラム出席者に直接依頼することとした。抽出総数は 170 人で、内訳等は表 1 のとおりである。

（２）回収数及び回収率

アンケート調査の回収数及び回収率は表 1 のとおりである。全体では、170 人中、63 人（37.1%）から回答があった。そのうちインターネット経由は、19 人である。

表１．修了生によるアンケート調査の回収状況

2006（平成 18）年度入学	抽出数	33
	回答数	4(12.1%)
2007（平成 19）年度入学	抽出数	33
	回答数	12(36.4%)
2008（平成 20）年度入学	抽出数	35
	回答数	9(25.7%)
2009（平成 21）年度入学	抽出数	31
	回答数	16(51.6%)
2010（平成 22）年度入学	抽出数	37
	回答数	13(35.1%)
入学年度無回答		9
合計	抽出数	170
	回答数	63(37.1%)

*抽出数とは、修了生の人数である

*回答数の後ろの()は、回収率である。

４．調査の内容

アンケート調査の質問項目は、Ⅰ.在学当時の状況について、Ⅱ.在学当時の支援関係について、Ⅲ.修了後の効果について、Ⅳ.現在の状況について、Ⅴ.香川大学、本研究科へのご要望、Ⅵ.あなた自身について、の６項目についてである。詳しい内容は第３章の資料編を参照願いたい。

５．集計方法

集計方法は、各問ごとに単純集計を行い、合計数とその割合（小数点第１位未満を四捨五入）を％で表示した。なお、回答にあたって、未記入（無回答）と答えたものは、集計数に含めないこととした。そのため、問ごとに集計総数が異なっている。

なお、各問ごとの集計結果は、第３章資料編に綴っているので、参照願いたい。

第２章　調査結果について

１．回答者の属性

問 29～問 36 は、回答者（修了生）の入学時の年齢、住所所在地及び勤務地、就業状況、職種等を問うたものである。集計結果については、前述したとおり無回答を除いているため、集計総数が問ごとに異なっているのでご注意願いたい。

（１）入学時の年齢（問 29）

入学時の年齢については、30 歳代（50.0%）が最も高く、以下 50 歳以上（18.5%）、20 歳代（16.7%）、40 歳代（14.8%）と続いている（図１を参照）。

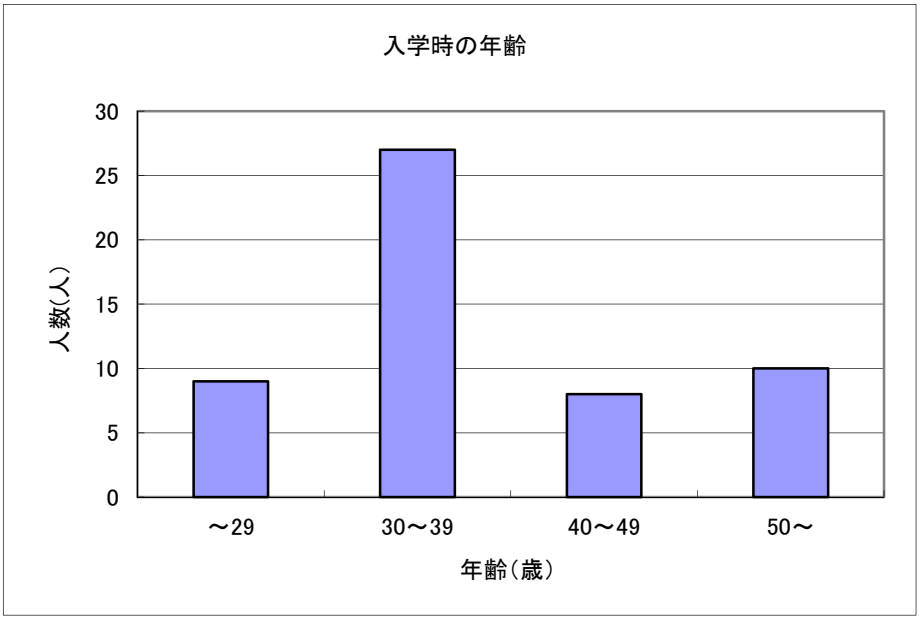

図１　入学時の年齢

（２）入学時の自宅所在地及び勤務地（問 30）

研究科入学時における自宅所在地は、高松市 54.5%（30 人）で、高松市以外の香川県 32.7%（18 人）、徳島県 3 人（5.5%）、高知県 1 名(1.8%)、愛媛県 2 名(3.6%) 、兵庫県 1 名(1.8%)となっている。

勤務地は、高松市 65.5%(36 人)で、高松市以外の香川県 18.2%(10 人)、徳島県 3 人(5.5%)、高知県 1 名(1.8%)、愛媛県 1 名(1.8%)となっている。

（３）入学時の就業状況、職種、役職について（問 31、32、33）

問 31 は本研究科の修了生が入学時に正規雇用で働いているか、非正規雇用で働いているかを問うたものである。正規雇用が 89.1%（49 人）、非正規雇用が 5.5%（3 人）、働いていないは 5.5%（3 人）である。

職種は、建設・機械関係が一番多く 22.6%（12 人）、続いて、公務員 20.8%（11 人）が多く、以下、商社・金融関係 13.2%（7 人）、販売・サービス関係 13.2%（7 人）、情報・通信

関係 9.4%（5 人）、教育関係 9.4%（5 人）と続く（図 2 を参照）。

役職は、社長 12.5%（3 人）、課長 10.0%（4 人）、会社役員 10.0%（4 人）、一般社員 10.0%（4 人）が多く、次に主査、主任 7.5%（3 人）が多かった。他に、部長、主事、次長、マネージャー、係長が 5.0%（2 人）と続いた。

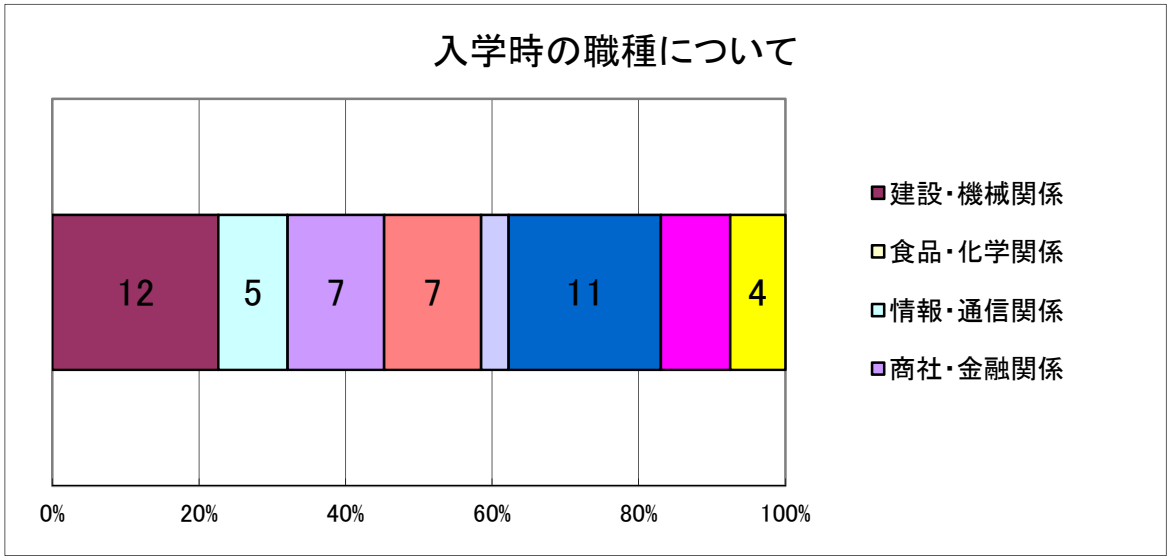

図 2．入学時の職種について

（4）現在の就業状況、職種について（問 34､35､36）

問 34 は本研究科の修了生が現在、正規雇用で働いているか、非正規雇用で働いているかを問うたものである。正規雇用が 88.9%（48 人）、非正規雇用が 11.1%（6 人）である。

職種は、建設・機械関係が一番多く 20.4%（11 人）、続いて、公務員 18.5%（10 人）が多く、以下、商社・金融関係 13.2%（7 人）、販売・サービス関係 13.2%（7 人）、情報・通信関係 9.4%（5 人）、教育関係 9.4%（5 人）と続く（図 3 を参照）。

役職は、社長 15.2%（7 人）が多く、次に、一般社員 8.7%（4 人）が多く、続いて、課長、主任、係長が 6.5%（3 人）と続いた。

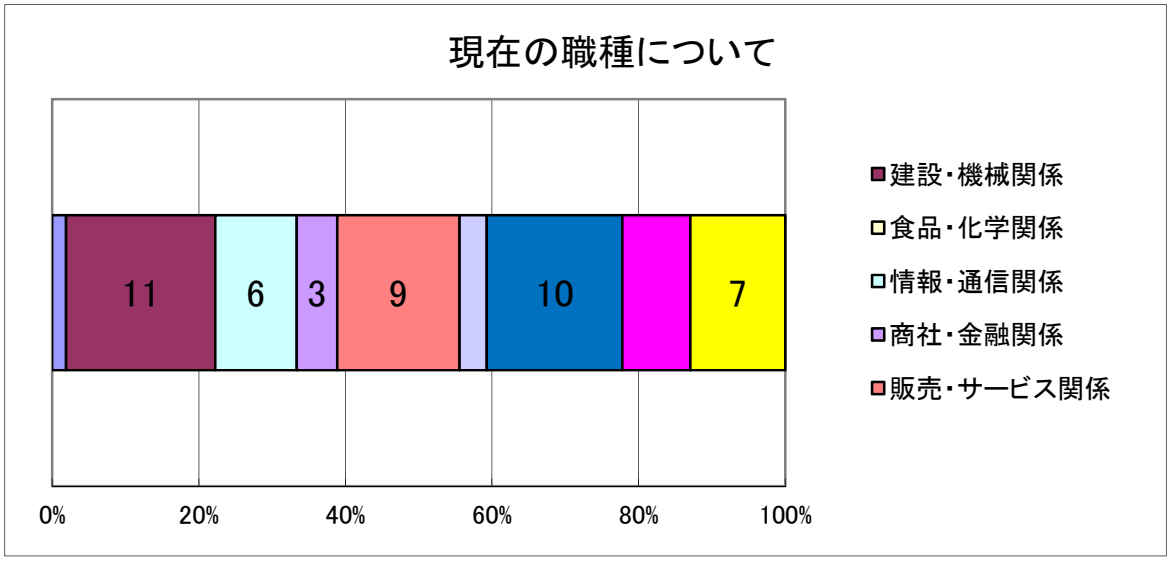

図 3．現在の職種について

２．分析

１．在学当時の状況について

（１）在学中の出席状況について（問 1）

在学中にどれだけ出席できたかを見てみる。全ての授業に出席した場合を 100%とし回答してもらったところ、平均 86.55%となる（図４を参照）。

前回アンケート調査では、84%であり、若干増加している。

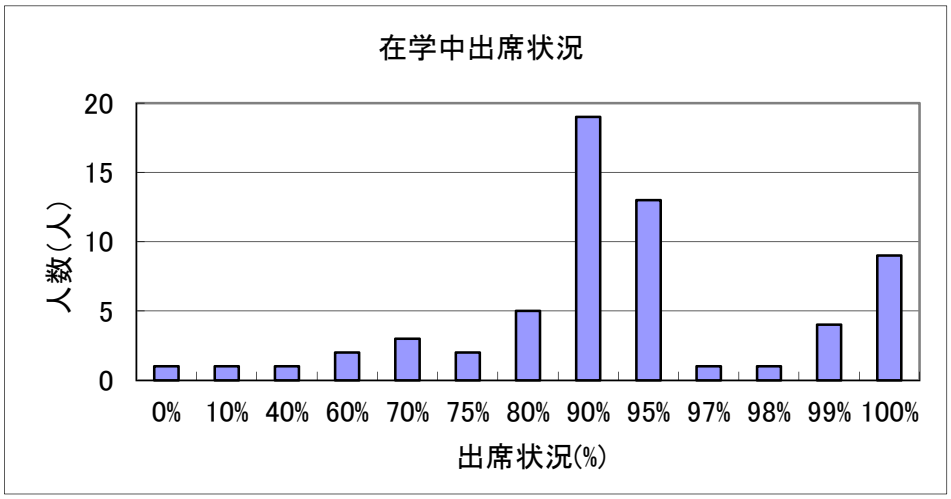

図４．在学中出席状況

（２）在学中勉強時間（問 2）

在学中に週に勉強時間をどの程度、またどのように確保したのかを見てみると、平均、13.30 時間となる（図５を参照）。

前回アンケート調査では、14.3 時間であり、１時間ほど減少している。

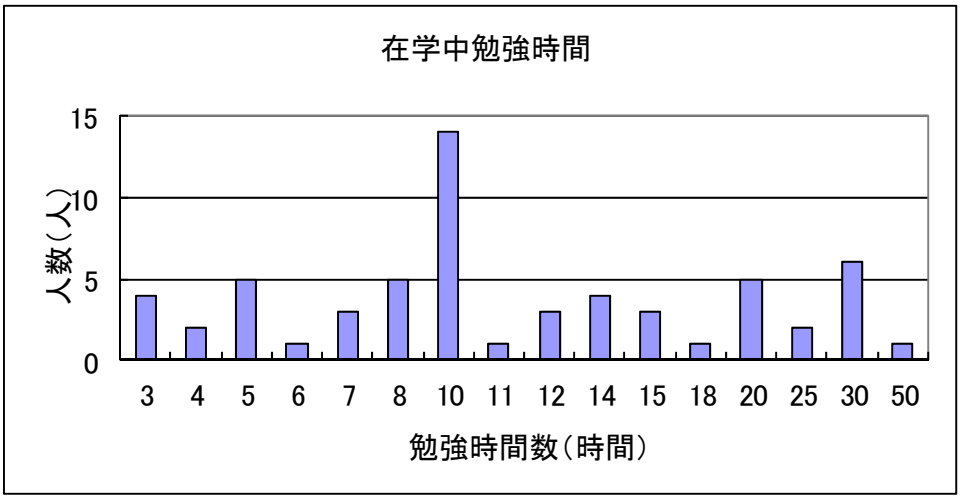

図５．在学中勉強時間

（３）仕事で役立ったと思う科目（問 3）

仕事に役立ったと思う科目を見ると以下のようになる。最大３つ答えているので、他の問よりも総数が多くなっている。

表２．仕事の上で役立ったと思う科目

地域 ICT マネジメント	1	0.7%
IT マネジメント	2	1.4%
アカウンティング	15	10.1%
イノベーション・マネジメント	2	1.4%
グローバル戦略論	1	0.7%
ゲーム理論	2	1.4%
ディスクロージャー戦略	7	4.7%
ビジネス・アカウンティング	4	2.7%
ファイナンス・マネジメント	3	2.0%
プロジェクト・マネジメント	3	2.0%
プロジェクト研究	7	4.7%
マーケティング・マネジメント	9	6.1%
マーケティング戦略	1	0.7%
マネジメント・アカウンティング	1	0.7%
マネジメント・システム	6	4.1%
マネジメント戦略	3	2.0%
意思決定分析	5	3.4%
環境経営	1	0.7%
経営リスクマネジメント	1	0.7%
経営管理論	4	2.7%
産業クラスター論	3	2.0%
四国経済事情	14	9.5%
事業創造論	1	0.7%
自治体財政政策	2	1.4%
商品システム・マネジメント	3	2.0%
証券市場分析	2	1.4%
人事管理論	3	2.0%
組織行動論	14	9.5%
地域マネジメントとファイナンス	2	1.4%
地域開発と資本市場の役割	1	0.7%
地域活性化と PPP	7	4.7%
地域活性化と観光創造	1	0.7%
地域経済分析	1	0.7%

地域公共政策	5	3.4%
都市開発論	2	1.4%
統計分析	5	3.4%
費用便益分析	1	0.7%
総計	148	100.0%

（4）仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目（問 4）

仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目を見ると以下のようになる。この問も最大３つ答えているので、他の問よりも総数が多くなっている。

表３．仕事とは関係なく役立ったと思う科目

アートと地域活性化	1	0.8%
アカウンティング	4	3.4%
イノベーションマネジメント	1	0.8%
ゲーム理論	7	5.9%
ディスクロージャー戦略	4	3.4%
デザイン・マネジメント	2	1.7%
ファイナンス・マネジメント	1	0.8%
プロジェクト・マネジメント	1	0.8%
マーケティング・マネジメント	10	8.4%
マネジメント・システム	5	4.2%
マネジメント戦略	4	3.4%
意思決定分析	4	3.4%
環境経営	1	0.8%
企業評価分析	2	1.7%
企業倫理	1	0.8%
経営リスク・マネジメント	3	2.5%
経営管理論	2	1.7%
経済分析	1	0.8%
国際経営	4	3.4%
産業クラスター論	6	5.0%
四国経済事情	14	11.8%
事業創造論	2	1.7%
自治体財政政策	1	0.8%
実践型社会起業家論	2	1.7%
商品システム・マネジメント	1	0.8%
証券市場分析	2	1.7%

人事管理論	1	0.8%
組織行動論	10	8.4%
地域活性化と PPP	3	2.5%
地域活性化と観光創造	1	0.8%
地域経済分析	1	0.8%
地域公共政策	5	4.2%
地方財政政策	1	0.8%
統計分析	11	9.2%
総計	119	100.0%

（５）土曜日の開講について（問 5）

社会人学生が多いこともあり、現在は土曜日も開講しているが、それについての回答が以下のようになる（図 6 を参照）。「必要」（71.7%）「ある程度必要」（23.3%）となり、必要であるという回答が非常に多い。

前回アンケート調査では、必要（68%）、ある程度必要（16%）合計 84%であり、土曜日開講の必要性が高まっている。

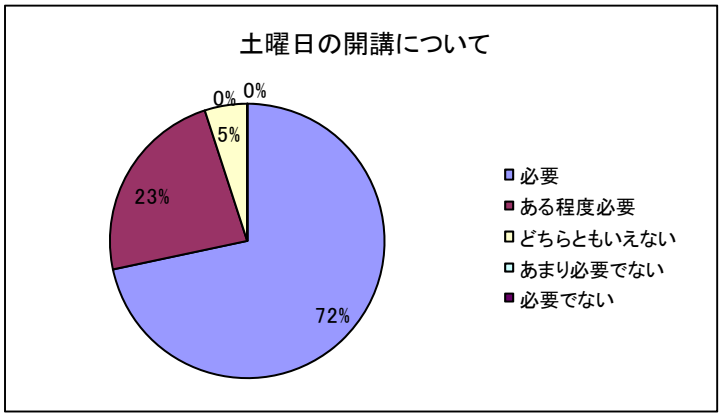

図 6．土曜日の開講について

（６）プロジェクト研究について（問 6）

本研究科のカリキュラムの集大成となるプロジェクト研究について見てみると、「満足している」（40.0%）および「ある程度満足している」（46.7%）で合計が 8 割を超えることになる（図 7 を参照）。

前回アンケート調査では、「満足している」（26%）、「ある程度満足している」（28%）で合計が 54%であったので、満足度が大きく向上している。

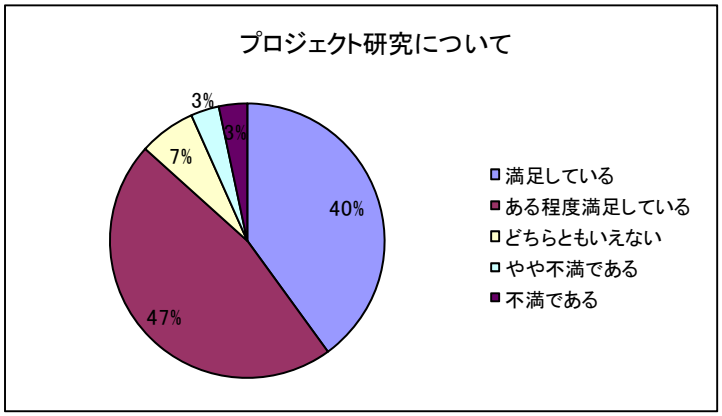

図７．プロジェクト研究について

（７）社会人組織、社会人組織以外からの支援について（問 7､8）

社会人学生に、社会人組織（所属組織）からの支援ならびに社会人組織以外（奨学金など）からの支援について見てみると、以下のような状況である（図８を参照）。

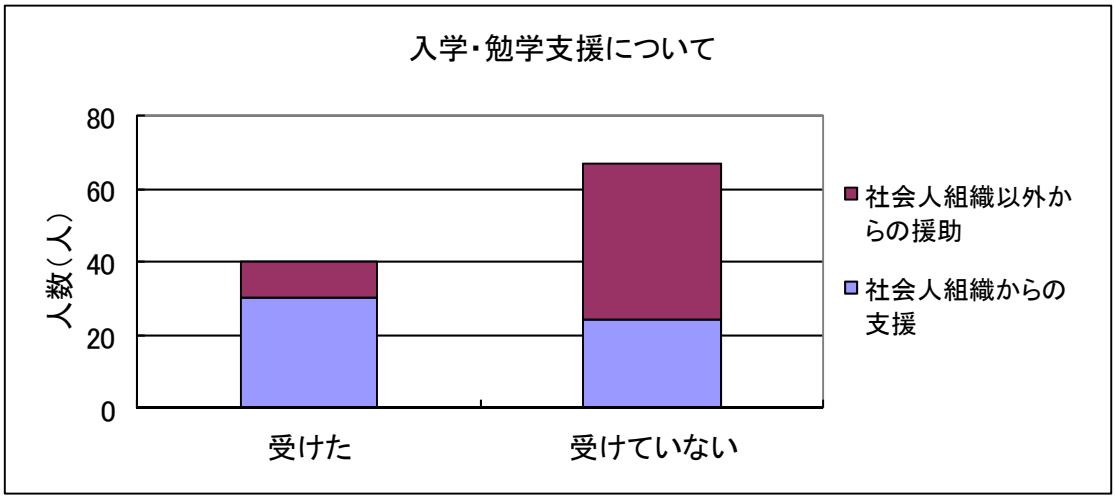

図８．入学・勉学支援について

（８）学部学生の就職について（問 9）

学部からの進学生に、就職についての対応についての満足度を見てみることにする（図９を参照）。

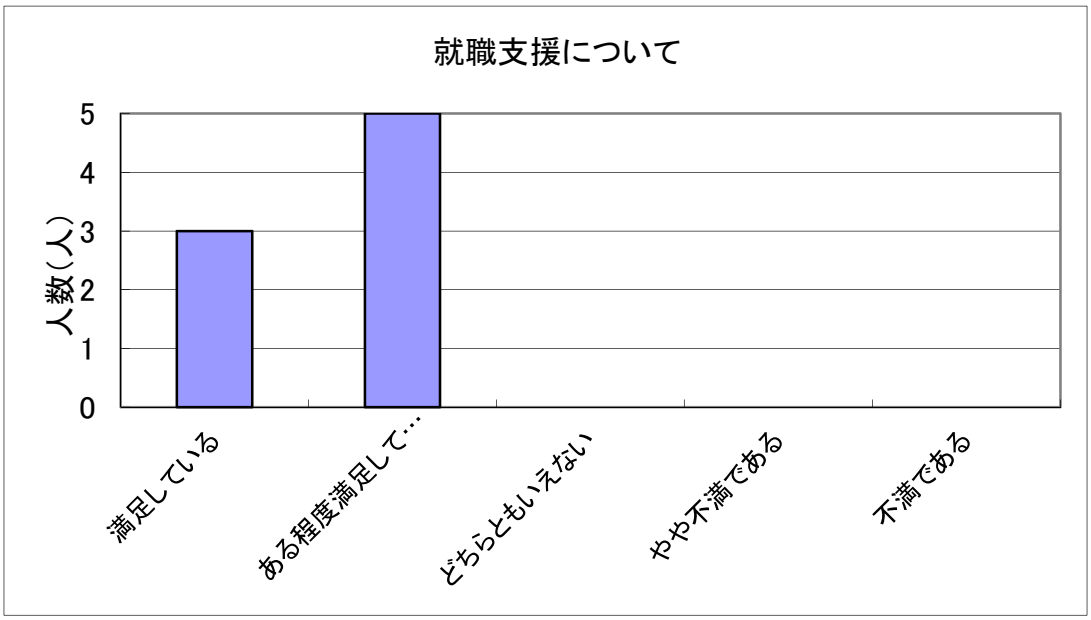

図９．就職支援について

（９）自習室、教室の環境について（問 10､11）

自習室と教室の環境についての満足度を見てみることにすると、教室は「満足している」（34.5%）､「ある程度満足している」（56.9%）で合計が 91.4%となり、9 割以上が満足と回答している。自習室は「満足している」（22.4%）､「ある程度満足している」（46.6%）で合計が 69.0%となり、ある程度の満足度を得ている（図１０を参照）。

前回アンケート調査では、教室は合計 71.0%が満足、自習室は合計 61.3%が満足と回答しているので、どちらも満足度が向上していることが分かる。

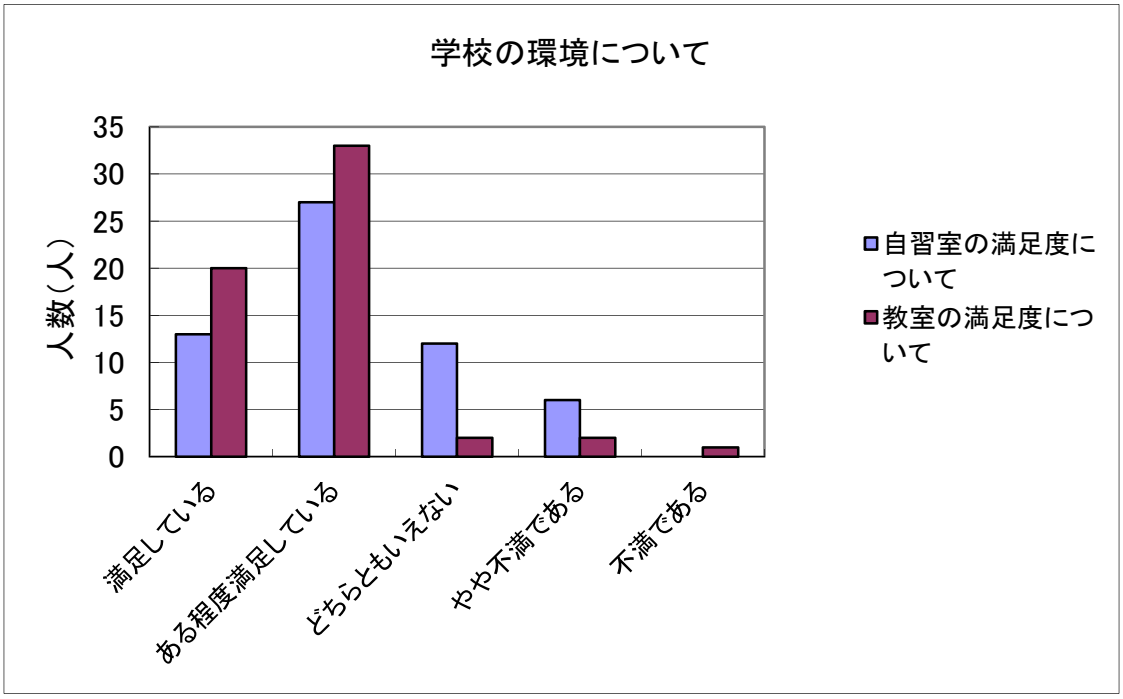

図１０．学校の環境について

２．修了後の効果について

（１）ＭＢＡ取得の評価について（問 12）

ＭＢＡ取得が組織内でどの程度評価されたかを見てみると、以下のとおりである（図１１を参照）。

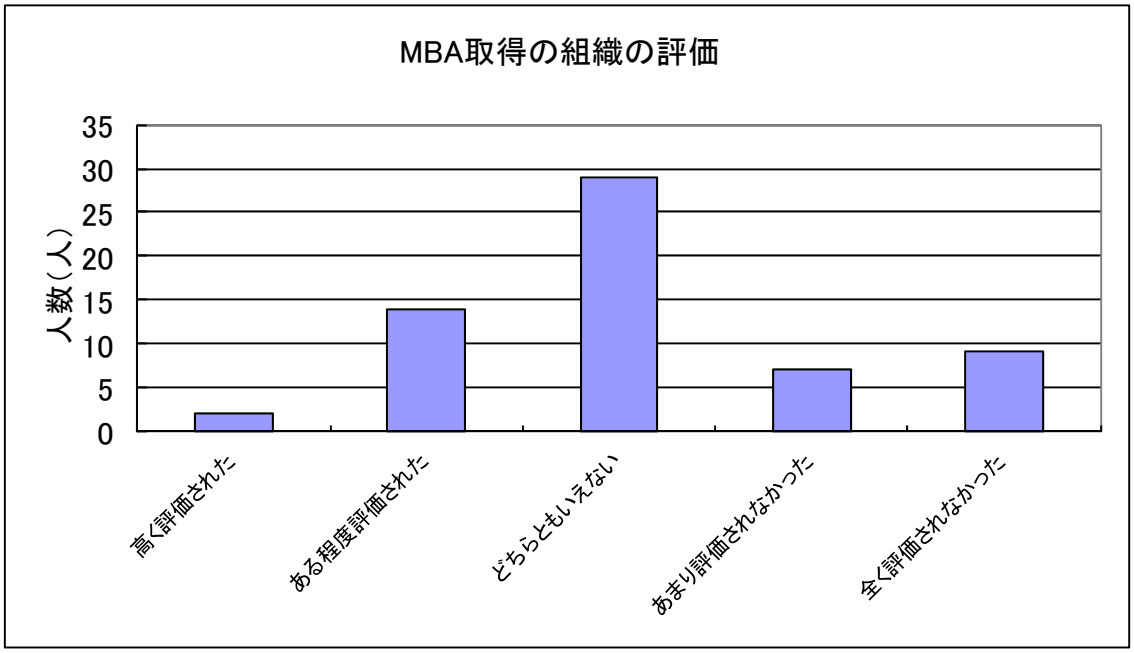

図１１．ＭＢＡ取得の組織の評価

（２）転職、起業意図について（問 13､14､15）

入学前に転職、起業の意図を持っていたか、およびＭＢＡ取得で転職、起業をしたかについて見てみると、以下のとおりである（図１２、図１３を参照）。

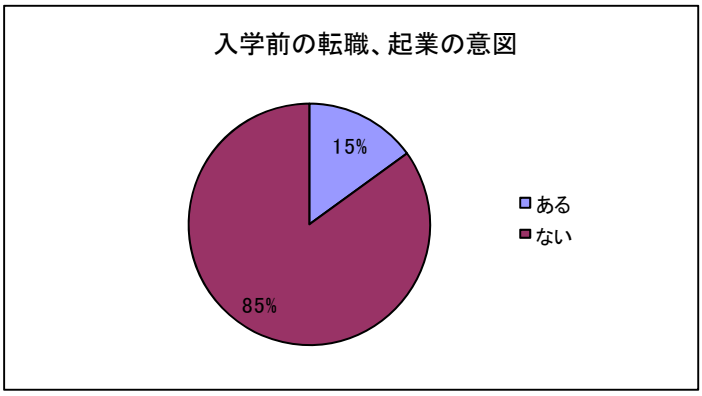

図１２．入学前の転職、起業意図

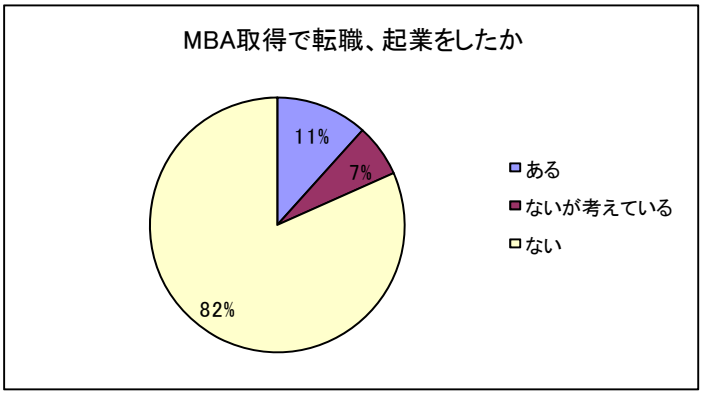

図１３．MBA 取得で転職、起業をしたか

問 14 で「ある」もしくは「ないが考えている」と答えた人について、ＭＢＡ取得は転職に役立ったかを見てみると、以下のとおりとなる（図１４を参照）。

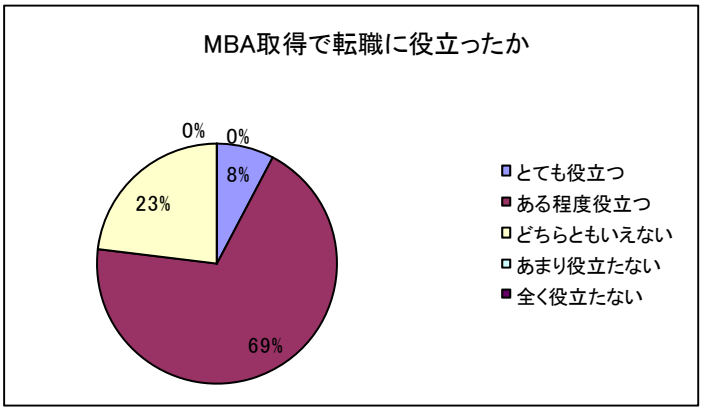

図１４．MBA 取得で転職に役立ったか

（３）在学時の同級生との交流について（問 16、17、18）

現在でも在学時の同級生などと交流・連絡を持っているかについて見てみると、「とても持っている」（16%）もしくは「ある程度持っている」（34%）という回答が多い（図１５を参照）。

そこで、問１６で「とても持っている」もしくは「ある程度持っている」と答えた人について、どのような交流があるのかについて見てみると、仕事上役立つ交流（19%）よりも個人的な交流（42%）が多い（図１６を参照）。

また、問１６で「とても持っている」もしくは「ある程度持っている」と答えた人について、それがどのような相手かについて見てみると、同級生との交流が多い（72%）（図１７を参照）。先輩、後輩との交流も合計 28.3%で、前回の合計 16.1%から増加しており、縦のネットワークの構築が伺える。

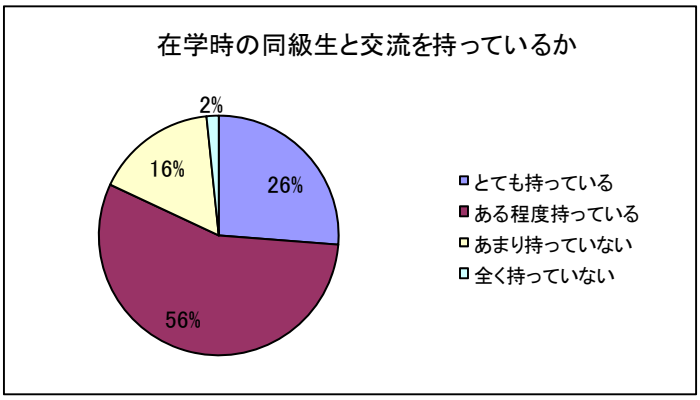

図１５．在学時の同級生と交流を持っているか

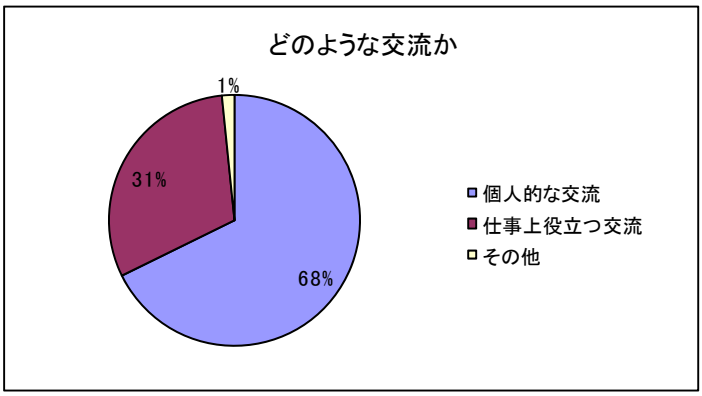

図１６．どのような交流か

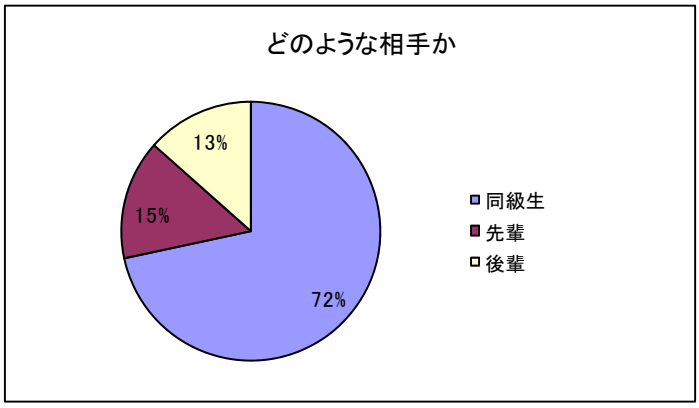

図１７．どのような相手か

（４）大学院教育で身についた能力と現在の仕事で必要な能力（問 19）

ここでは、19 の能力について、大学院教育でどの程度身についたか、また現在の仕事でどの程度必要とされているかを、「身についた」「ある程度身についた」「どちらともいえない」「あまり身についていない」「身についていない」、「必要」「ある程度必要」「どちらともいえない」「あまり必要ない」「必要ない」の 5 段階で回答してもらった。

なお、大学院教育の項目の「身についた」から「身についていない」までを、“5、4、3、2、1”の 5 段階に（図 18-1 を参照）、現在の仕事の項目の「必要」から「必要ない」までを、“5、4、3、2、1”の 5 段階で表示した（図 18-2 を参照）。

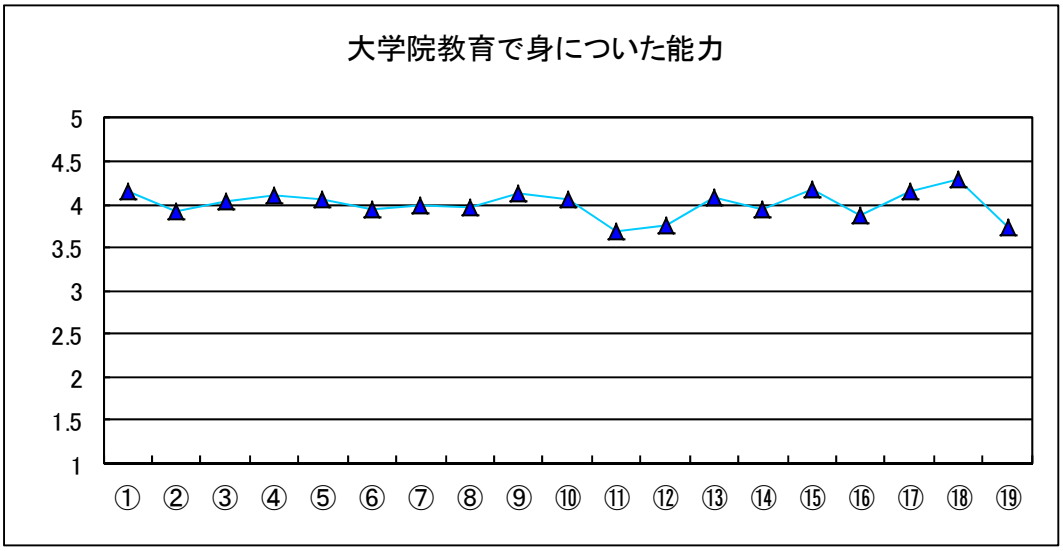

図１８－１．大学院教育で身についた能力

表４　大学院教育で身に付いた能力（平均点順）

	平均値	標準偏差
⑱プレゼンテーションする力	4.29	0.79
⑮論理的に考え、物事を進める力	4.18	0.82
①物事に進んで取り組む力	4.16	0.87
⑰ディスカッションする力	4.16	0.78
⑨意見の違いや立場の違いを理解する力	4.13	0.86
④現状を分析し目的や課題を明らかにする力	4.11	0.85
⑬幅広い知識や教養	4.08	0.77
⑤課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	4.05	0.76
⑩自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	4.05	0.86
③目標を設定し確実に行動する力	4.03	0.90
⑦自分の意見を分かりやすく伝える力	4.00	0.80
⑧相手の意見を丁寧に聴く力	3.97	0.87
⑥新しい価値を生み出す力	3.95	0.72
⑭専門分野に関する知識や技能	3.95	0.83
②他人に働きかけ巻き込む力	3.92	0.66
⑯文書等を作成する力	3.87	0.95
⑫ストレスの発生源に対応する力	3.76	0.91
⑲リーダーシップ	3.74	0.82
⑪社会のルールや人との約束を守る力	3.68	1.00

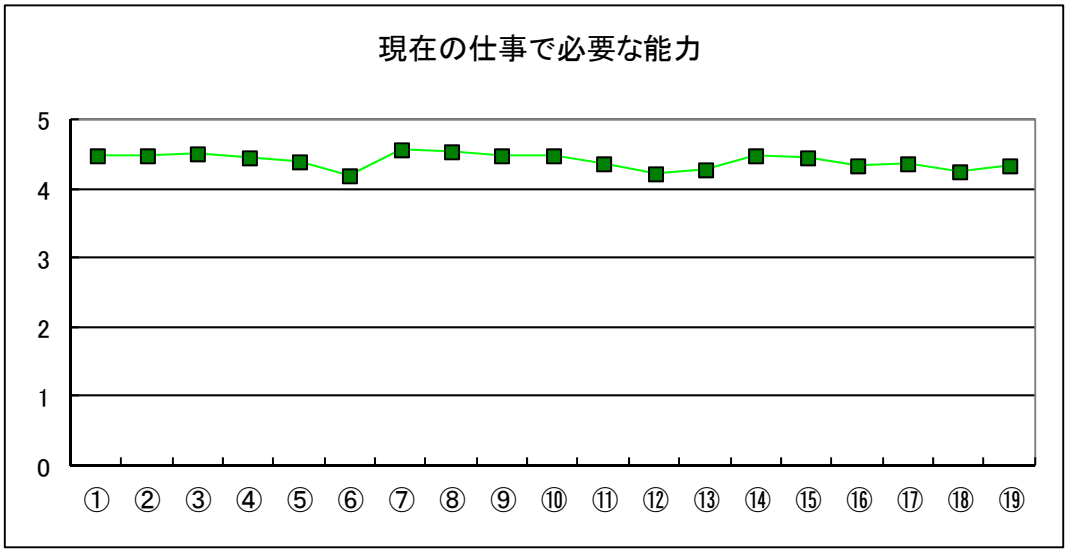

図１８－２．現在の仕事で必要な能力

注：①物事に進んで取り組む力、②他人に働きかけ巻き込む力、③目標を設定し確実に行動する力、④現状を分析し目的や課題を明らかにする力、⑤課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力、⑥新しい価値を生み出す力、⑦自分の意見を分かりやすく伝える力、⑧相手の意見を丁寧に聴く力、⑨意見の違いや立場の違いを理解する力、⑩自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力、⑪社会のルールや人との約束を守る力、⑫ストレスの発生源に対応する力、⑬幅広い知識や教養、⑭専門分野に関する知識や技能、⑮論理的に考え、物事を進める力、⑯文書等を作成する力、⑰ディスカッションする力、⑱プレゼンテーションする力、⑲リーダーシップ

（５）学んだことに満足しているかについて（問 20）

ここでは、総合的にみて、研究科で学んだことについて満足しているかについて見てみると、「満足している」（58.3%）、「ある程度満足している」（35.0%）が多く、全体的に満足度は高い結果となっている（図１９を参照）。

前回は、「満足している」（39%）、「ある程度満足している」（48%）の合計が 87%であり、満足度が向上していることが分かる。

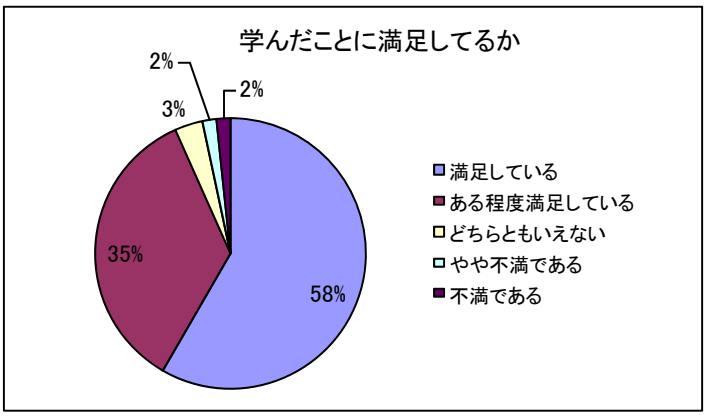

図１９．学んだことに満足しているか

（６）愛着について（問 21）

研究科に愛着があるかどうかを見てみると、「非常にある」（45.9%）、「ある程度ある」（49.2%）で 95.1%となり、「愛着がある」という回答がほとんどといえるほど多い（図２０を参照）。前回の 97%とほとんど変わっていない。

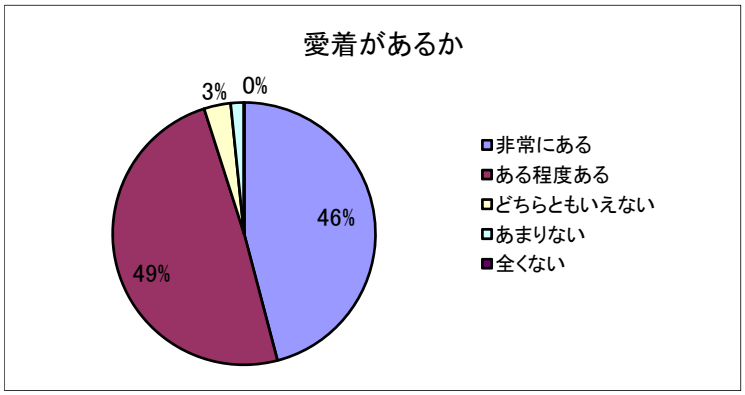

図２０．愛着があるか

３．現在の状況について

（１）自己研修について（問 23）

能力向上のため、何か自己研修を行っているかを見てみると、行っている人（50.8%）と行っていない人（39%）と回答は、2 分された（図２１を参照）。

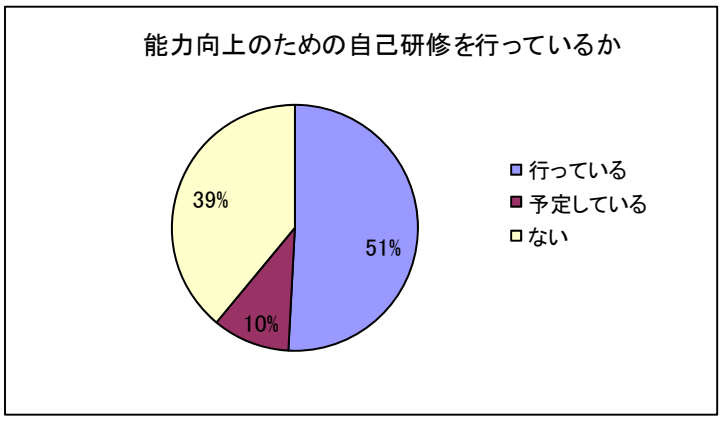

図２１．能力向上のための自己研修を行っているか

（２）地域活動について（問 24）

個人あるいはグループで地域のための活動を行っているかを見てみると、3 割以上が地域のための活動を行っていると回答した（図２２を参照）。

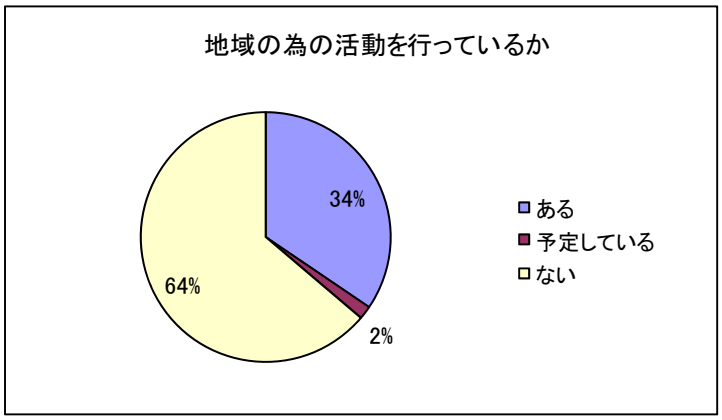

図２２．地域の為の活動を行っているか

（３）研究科開催の講演会・シンポジウムなどについて（問 25､26､27）

まず、研究科で開催した講演会・シンポジウムなどに参加したことがあるかについて見てみると、参加経験があるという回答が 83.1%と多い（図２３を参照）。

また、研究科で開催した講演会・シンポジウムなどに参加しようと思うかについて見てみると、93.3%が参加を希望している（図２４を参照）。

さらに、研究科で開催する講演会・シンポジウムはどのような形がよいと思うかについて見てみると、「在学生や修了生対象」（5.0%）より「一般公開」が 88.3%と多い（図２５を参照）。

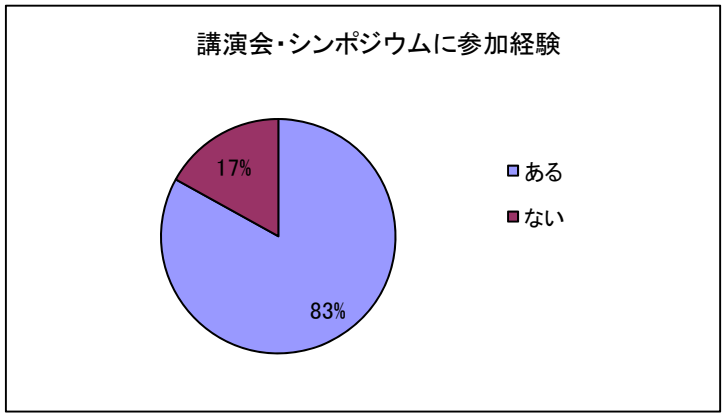

図２３．講演会・シンポジウムに参加経験

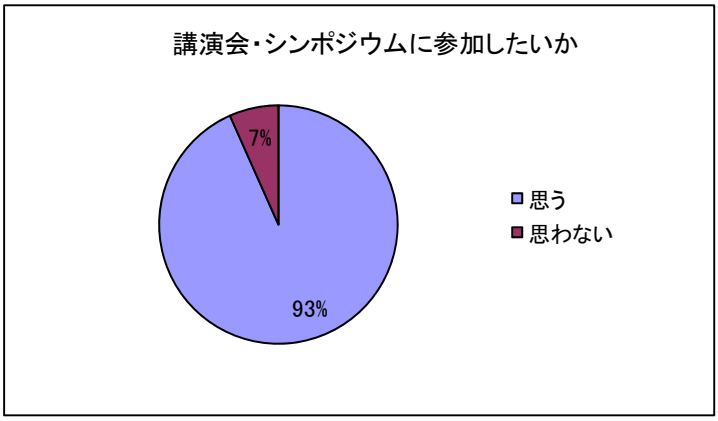

図２４．講演会・シンポジウムに参加したいか

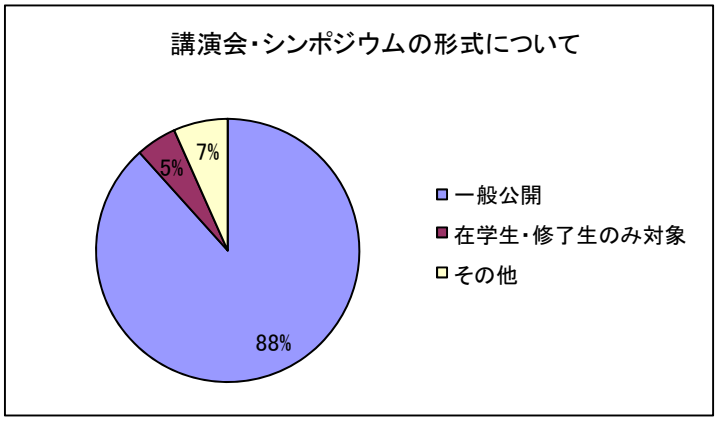

図２５．講演会・シンポジウムの形式について

（４）後期（10 月）入学の必要性について（問 28）

研究科に、後期（10 月）入学が必要かどうかについて見てみると、「非常に必要」（16%）や「ある程度必要」（13%）は、多くはない（図２６を参照）。

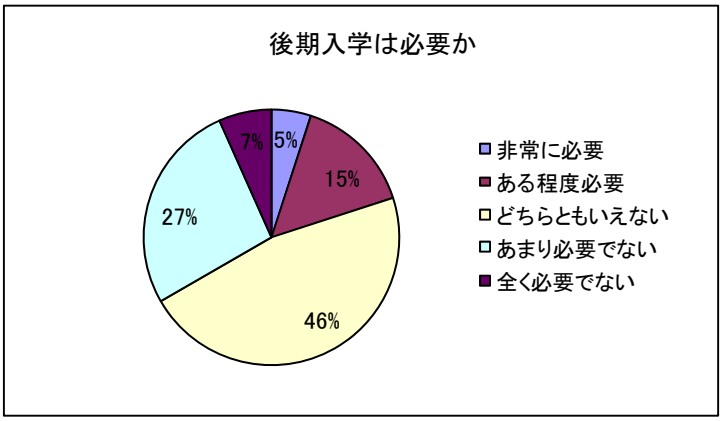

図２６．後期入学の必要性について

３．自由記述のデータ

問６　プロジェクト研究についてどう思いますか。またその理由はなんですか。・

・共同研究できたこと、また、その過程に意義があった。プロジェクト共同研究した学友の方がほかの学友より強く印象に残っているし、今もつながりが強い。

・時間は十分ではなかったものの、自分の興味のある事柄について深く調べることができた

・納得がいくまで徹底的に研究させてもらえた

・夜や休日を割いての研究や活動で苦しい時もあったが、地元の色々な方との打ち合わせや話が聞けて地域の実情が理解できたこと。

・現在及び将来的にも役に立つので

・教員が熱心に指導してくださったから。

・一つの課題を深く研究できる。

・もう少し、もっとという思いがあります。

・地域の発展に貢献できると思ったが、スクール内発表で終わった。その担当教員も退職したため表に出すことが出来なかった。でも今でも自分としては自分なりに満足している。

・担当教授の専門と違った研究を始め、論文も参考になるものが見つからず苦労しました。担当教授の得意ジャンルに近いものを選んだ方がより深い研究ができたと考えます。

・論文作成手法

・一つの事に思いきり集中できたから

・これに１年を費やすのであれば、他の有益な講義を受ける方が実務に役立つ。

・物事を多面的に考察することができ、地域の様々な人の協力を受け、地域における自分の存在というものを考えることができたため。

・自分の考えを建設的かつ論理的にまとめる方法を親切丁寧に教えて頂いた。

・学んだことを実践できる場ゆえ、総合力を要請される場ゆえ

・すごく大変でした

・卒論として成果をまとめることに価値があると思うから

・指導教員が２名で、方向性がなかなか定まらず、肝心の中身を掘り下げて深く議論するところに時間がとれなかった。後期は教員１名を学生が指名する形にして、内容の完成度を高

める方がよいと思う。

・自分の関心のあるテーマについて好きなだけ研究できた

・時間が足りず、論文が満足にできなかったことが思い残していることです。

・内容的には満足しているが、スケジュール的に、前期から論文に着手できるようにした方が、より良いものになったと思います。

・先生や仲間と議論し自分なりの結論に辿りつくまでの試行錯誤の過程が良い経験となった。

・3 名で研究を行ったが、研究課題を検討し、いろいろなところでのアンケートや 3 人での話し合い、ゼミでの討論会等いろいろな視点から物事を考えることを教わったのでとても満足している。

・指導していただいた先生の下、(1) 講義だけでは教授いただけないことまでも含めて議論できた(2) ゼミとしての和も保て人間関係が築けた

・プロジェクト研究については、先生方の親身な指導、同級生と共に頑張れた事が良かった。

・低レベルの指導しかできず、指導力がないとしか思えません。期待していただけにとても残念。時間を無駄にしたような気持ちです。ひとりひとりの可能性や強みを引き出せるような対話のできる教授が少ないようですね。

・プロジェクト研究は、１年の後期から始めるべきだったと思う。２年生になってからの１年だけでは、短すぎ、すっごく大変だった。後半年ぐらいあったら、もっとゆっくりできたし、余裕もあって、発想も豊かになれたと

・これまで物事を考えるときに表面的な知識を並べていたが、プロジェクト研究に取り組むことで多くの知識を自分で咀嚼して、アウトぷっとするということを学ぶことができ、今後の仕事に活かせると思うから。

・自身の業務やそれ以外での視野や知識を広げることができ、その時点ではあまり必要が無いことでもあとで役に立ってくる。

・グループで研究を行ったが、他の方の意見を

・テーマがある程度自分で設定できて、業務に関連することを研究できた。

・入学前に設定した自分なりに考察すべきテーマを取り上げることができ，一定の成果を挙げることができたため。

・社会人経験が無い生徒に対しても、研究を行いやすいよう環境整備をしっかりしていただけたため。

問 22．地域マネジメント研究科のカリキュラム等について自由に意見を記入してください。

・「地域経済事情」を担当する講師の団体・企業等を視察するカリキュラムを設けてはどうでしょうか。

・金融関係や貿易等で現場で働いている 40 代前後の人に講演してもらいたい。

・カリキュラムには満足している。教員の方々には大変熱心に指導していただき感謝しています。

・良かったと思った講座がなくなるのは寂しい。一年次からプロジェクト研究をもっと意識、準備させる方がよいのでは？

・私はビジネス科でほとんどして、もっと時間的な余裕があれば、産業クラスター論、新産業政策などのパブリック系科目の選択をしたらよかったと思っただけです。振り返って思い出したら…でも満足しています。

・各科目は魅力的だったと思います。自分の反省としては、仕事の都合で基礎（共通）科目→実践（ビジネス）科目という流れではなくバラバラと受講して、基本的な内容を 2 年生で学んだこともあり勿体ない点がありました。また、今後激動が予想される世界やアジアの経済で、四国の企業や人口がどう立ち向かっていくべきかを追求することも地マネの現役や OB 学生に課せられた大きなテーマとなっていると思います。

・学術的な講義ではなく、実際の経営に関することを学びたいと思った。

・プロジェクト研究に時間を割くよりは、実務的な講義を増やしていく方が実になると感じます。

・修了生、在学生が一緒に参加するプログラム（域学連携の推進）があれば積極的に参加したい

・企業で働いた方を教授として半数程度は迎えるべきと思います。社会人にとって必要なのは「実践でどうするべきか」だと思うからです。

・アメリカの MBA のようにプレゼンテーション専門の授業が必要と思います。

・併せて心理学の勉強も必要と思います。顧客心理や社員の心理にもとづく学業施策や人事戦略作りに必要なためです。

・ビジネス系のカリキュラムが少ない。基本的なフレームワークを学ぶ講義やケースメソッドを活用した講義ももっと多くしてよいと思う。学生からの講義評価の結果をオープンにし、翌年の学生が受講する際の参考に出来るようにすると良い。

・研究者による理論の講義と実務家による講義のバランスがよい。

・不満足な授業が多いが、自分のためになる授業のインパクトが大きいので、それをカバーし、いいイメージとして残った。

・修了生を非常勤講師にしたり、修了生ゼミを開校する。

・遠方の修了生の会社にも、一定の額を納めれば講座を聴けるネット講座。

・地域活性系の授業をもう少し増やし、ファンド系を重視する。

・現地視察系の講座を増やす。

・地元企業提供の授業を増やす。

・地域マネジメントの特性であると理解はしているが、時代に適したグローバル戦略、海外まで捉えた覚が特に偏りがある。・人事管理、労務管理系の要素が薄かった。

・講義室の中での講義だけでなく、地域の問題に直接アプローチしてワークするようなカリキュラムがあってもよいと思う。

・もっと授業でディスカッション等の時間や、チームでの研究に時間を増やしてほしい。

・カリキュラム自体が仕事上で役に立ったものは少ない。また、人脈に関しては、地元企業の方も多く、やはり地域で活動するレベルに限定されるので、全国区の人脈になりにくい。

・内容については非常に満足している。2 年生は、まだ、もう少し授業を受講できたのではなかったかと反省している。

・2 年間は短く、時間的に無理があった。もう少し、3 年とか 4 年とか幅広く取って欲しかった。

・地域社会への取り組みはすばらしいと思うが、本来ビジネススクールで学ぶことにも力を入れてほしい。少し、在学中から物足りなさは感じていた。個人的にビジネススクールで今後取り組んでほしい項目はファイナンスとマーケティングの科目をより深く探求できるようにしてもらいたい。ファイナンスでは企業価値の計測など M&A に使えるような知識の習得にも力を入れてもらえたらと考えている。

・数学の基礎科目がありましたが、興味が沸くものであった。四国地域に関する、外部の企業の講師からお話を聞けて、有意義なものであった。

・社会人にとっては中途半端な理論講義より，実務体験豊富な先人から発せられるメッセージのほうが重要であり，多様な外部講師陣こそが，香川大学ＭＢＡが生き残る一つの柱であると思う。また，井原健雄教授からの地域科学の伝統を絶やさぬことも，もう一つの柱だと思う。

・通学することで仕事に支障がでることだけは嫌だったので、もう少し地マネの人たちと交流したかったが、課題をこなすことが精いっぱいでした。遠隔授業など、在学中にはかなり配慮いただき、本当にありがとうございました。

Ｖ．香川大学、あるいは地域マネジメント研究科がもっと重視したり改善したりした方が良いと思う教育内容や取り組み、要望などがございましたら、ご自由にお書きください。

・入学当時の中国経済特に中国国内の物流状況も私なりに調査研究していたのですが、イメージしていた程の成果はあげられませんでした。その理由は①当該科目または類似科目がなかった②必然的に中国人の教員がいなかった③②の教員がいれば中国の物流企業を視察することも可能となり状況をより身近に研究することができたのではないか、という思いがありました。

・ややアカデミックに偏重しているように見えるので、四国経済事情のような現場の人間を招へいして、講演する機会を増やした方が良いと思う。できるなら 30-40 代の中間管理職クラスの人が望ましい。

・西山先生などすばらしい経験を持った方がいなくなった。

・中小企業診断士の資格認定を行ったらよい。※現在中四国の国公立では兵庫県立大のみ。

・シンポジウムを１年次の後期にしては？

・今後もプロジェクトマネジメント研究会で板倉研究科長や日本経営システム学会長尾先生のところへは参りたい。

・卒業しても地マネの自習室は使えるのでしょうか。何人かが集まってであり、当然、その都度入室許可を申請したいです。

・自分が他県人であるせいか、香川県に限った先生方や講師の方のお話が多いと感じました。地マネは四国のビジネス界の未来のリーダーが通う場所になってほしいと思います。

・他のビジネススクールと比べるとまだ情報の発信が少ないと思います。先生方や私たち OB、そして現役の学生も含めて、著作物や論文、研究成果を外に向けて発表していけるとよいと思います。

・第 7 講義室で仲間と学んだ 2 年間は、自分にとって思う存分勉強ができる夢のような時期でした。お世話になった先生方や職員の方に恩返しとなるような勉強の成果を生むべく今後とも努力して参りたいと思っています。

・地域経済、地域行政、地域活性化、何れかの部門で地域マネジメント研究科教授陣或いは卒業生による成功事例をつくることが先決課題と考える。そのためには、教授陣が先頭に立つか、卒業生の活動を全面的に支援するか、何れかの行動を起こして、地域のオピニオンリーダーを輩出すべきである。結果を出すことができれば、自ずと優秀な学生は集まると思考する。

・教授陣は、実際に経営を経験した方の方がいいと思う。単位取得はもう少し厳しくした方がいい。

・研究一筋の先生の講義も必要ですが、ビジネスマンとして一定の実績のある方の教員比率を増やすことが、地方の MBA 課程の売りになると思います。